その後いかがお過ごしですか？プロジェクト

NPO法人 奥矢作森林塾

対応してくれた人の名前 ： 大島光利（旧理事長）、小林太朗（新理事長）
調査員 ： 近藤 朗、清水雅子、浜口美穂
レポート作成者 ： 浜口美穂
取材日 ： 2016年10月15日
取材場所 ： 奥矢作レクリエーションセンター（奥矢作森林塾事務局）

活動内容（「山村再生担い手づくり事例集」より）

2000年の恵南豪雨により、一夜にして3万7千㎥もの流木が矢作ダムに流れ込んだ。この災害の時、消防長だった大島さんは、山林が荒れていることを身をもって実感し、同志に呼びかけて定年退職後の2006年、同会を立ち上げて山林（里山）再生、水質保全、森林環境教育に取り組み始めた。
そのうちに空き家が増え始め、活用を考える中で、2008年に空き家調査・意向調査・データ分析を行い、2009年には、移住希望者や都市の人も巻き込みながら「古民家リフォーム塾」も始めた。
同団体のスタッフは5人だが、地元住民、移住者などに手伝ってもらいながら事業を進めている。
＜里山再生＞
●炭焼き・・・ダムに流れ込む流木を一度に大量に炭化する大型窯、伝統的な黒炭窯、ドラム缶を利用した研修窯3基があり、研修窯は地元小中学生の森林環境教育に使用。流木炭は、リフォームした家の床下調湿、土壌改良、水質改良に活用。木酢液からディーゼル燃料を抽出するほか、稲のイモチ病を抑える実験をしている。
●河川環境整備・・・河川に流木炭を入れて水質保全。地元住民・小中学生と、養殖したカワニナとホタルの幼虫を放流し、ホタルの里づくりを行う。河川の草刈りの応援、生きもの調査などによる環境教育も。
●「里山ぼらんてぃあ」・・・毎月第2日曜日に実施。古民家の手入れ、田んぼや畑仕事、山仕事など。
●公園環境整備・・・草刈り、剪定、間伐材でベンチづくりなど。
＜田舎と交流、移住につなげる取り組み＞
●古民家リフォーム塾・・・毎年、1泊2日で10回講座を実施。地元の大工さんが指導。現在は、移住者待機住宅として利用予定の旧串原駐在所をリフォーム中。
●里山体験イベント・・・どんど焼き、つるかご編み、ヘボをぼう、中山太鼓体験、縁会（独身男女ふれあい交流）、等々。
●田舎暮らし体験館「結の炭家（すみか）」・・・リフォーム塾で一番初めに再生した築130年の古民家。宿泊し、田舎暮らしの体験ができる場、地元の人と交流できる場にしている。
＜指定管理者として運営＞
●奥矢作レクリエーションセンター ●串原体験道場「創手味亭（つくってみてい）」 ●串原郷土館
＜情報発信＞
●広報誌「山結人（やまゆいびと）」を発行・・・新聞折り込みや、串原地域では市の広報紙と一緒に全戸配布し、地域に会の活動を発信している。

前回の取材後、どのような変化がありましたか？

●予定通り！ 代表が交代
2015年9月1日に大島さんから小林さんに代表を交代した。前回調査（2013年）の時に伺った課題が「NPOの後継者づくり」だったので、その課題が解決されたことになる。2006年に団体を設立してから今年で10年。大島さんは当初から「10年のうちに代表を交代しないと森林塾はつぶれる」と思って後継者づくりを意識していたという。
小林さんは、20年前に山仕事がやりたいと埼玉県から串原村森林組合に就職。その後、合併により恵南森林組合で16年間、森林管理業務に従事。2014年に大島さんから「もっと地域に密着して楽しくやってみないか」とスカウトされた。

●スタッフの若返り
スタッフは、前回調査時より1人増えて6人になり、代表だけでなくスタッフも若返った。組織は「地域振興部門」「森林管理部門」「施設管理部門」に大きく分かれるが、全体像だけ全員で決めて、あとは各部門のトップに任せる方針で運営している。

●「地域の課題解決」の役割が増大
　市の指定管理、管理委託の事業が年々増えている（森林問題、交通問題など）。串原村の時は職員が30～40人いたが、合併後の串原振興事務所には職員が4人だけ。金もない。行政が本来の行政の役割を果たせないため、「我々がやらないと地域が守れない」「年寄りから子どもまで生き生き暮らせる地域づくりを」という意識でやっている。森林塾が地域の課題を調べ、計画を立て、実行する。それを行政がバックアップする体制で串原の事業が進められている。全ての事業を「移住・雇用」に絡めている。

●山で飯を食おう！
　三宅林業、串原農林、恵南森林組合などと連携しながら、森林の整備を進めている。また、「串原・里山づくりの会」をつくり、林野庁の事業を活用して毎週1回作業を行っている。9割以上が移住者で、チェーンソー講習から始めた。1000円の時給を払っている。移住者が「山で飯が食えるよう」に、力を入れている事業の一つ。
　また、鳥獣害対策と移住者の仕事づくりも絡めている。移住者には狩猟免許を取るように勧め、今年は10人が講習会に参加し、9名が免許（わな）を取得した。肉を流通させるため、食肉加工の中間処理施設の誘致を図っている。

●移住者も「みんなでやろまいか！」
　移住者は増え続け、現在7家族が空き家待ち状態。10年間で66人が移住した。恵那市の中で串原小学校・中学校だけが子どもの数が増えている。串原こども園も3～4人だけだったのが今や20人と大幅増。
　古民家リフォーム塾1期生3人がリーダーとなり移住者の会をつくって、年一回、結の炭家（ゆいのすみか）で交流会をしている。女性たちは、大島さんの奥さんがリーダーとなってことあるごとに集まり、朴葉寿司、野草の天ぷら、草餅などを作る会を実施している。移住者の悩み事はこれまでなら大島さんに集中していたが、今は移住者の会のリーダーが解決することも多くなった。森林塾のキャッチフレーズ「みんなでやろまいか！」に近づいてきている。

●串原郷土館（郷之驛）の復活とサトノエキカフェ
　2011年に設立された奥矢作移住定住促進協議会（奥矢作森林塾が事務局）では、2013・2014年度に農水省の交付金事業を活用して、市所有の“開かず”の串原郷土館を1年半かけてリフォーム。眠っていた多くの民具はデータ化した。今年から移住者が館内でサトノエキカフェを営業している。移住者が生計を立てる場所の一つとなるよう、徐々に郷土館の機能も復活させていく予定。

●奥矢作湖をカヌーのオリンピック公式練習場に
　恵那市カヌー協会とタイアップして、2020年の東京オリンピックを目指し、奥矢作湖を公式練習場として認めてもらうよう国交省と協議中。一般の行楽客にもカヌー体験をしてもらえるよう様々なコースを考えている。

●地域間の横のつながり「恵那市NPO連絡協議会」が始動
　NPOの会計・マイナンバー問題などの研修会、交流会などを行っている。

現在の課題は何ですか？（小林さんへの質問）

　スタッフが30代、40代の現役なので、みんなの生計を立てることがまず根本としてある。その上で地域の課題に取り組まなくてはならない。仕事がどんどん増えていて大変だが、やりがいはある。
　また、スタッフは移住者ばかり。地域住民からの期待を込めたプレッシャーもあるが、地元の名士である大島さんがやってきた10年間で得た信頼がバックにあるから安心して取り組める。

今の仕事の魅力は？（小林さんへの質問）

　ずっと森林組合で一人当たりの生産性を上げることだけを考えてやってきた。今は、地域課題としての荒廃森林を再生させるんだという思いで、ただ汗をかくだけで幸せを感じるセミプロたちとも一緒にやっている。精神的にも、補助・助成金を活用する意識も変わった。今は、やっている人が幸せにならないとダメだと思っている。

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイディアがありましたら教えてください

流域全体で移住者が増えていくよう、繋がるためのツールになればいい。

下流の子どもたちをいかにして上流部に呼ぶかということで、10年前から毎年7月第3土曜日に「奥矢作森林フェスティバル」（主催：矢作水源フォレストランド協議会、共催：奥矢作森林塾・矢作ダム管理所）を開催している。今年は1300人の参加があった。下流の人たちに上流の状況を見てもらいたい、ダムの役割も知ってもらいたいと思っている。

10月第3日曜日の中山神社のお祭り「中山太鼓」にも外部の人たちに参加してもらおうと、森林塾が交流事業として企画。中山太鼓保存会の協力で叩き方の指導も行っている。前日から奥矢作レクリエーションセンターに泊まって稽古をする。現在、中山太鼓参加者の約6割が外部の人。

写真

小林さんと大島さん

サトノエキカフェを運営する藤本さんと息子のあおくん。京都から移住してきたばかりの時は人見知りしていたというあおくんは、今は信じられないくらい人懐っこく、のびのびと遊んでいる

まったりと落ち着くサトノエキ内部

縁側でまったり。心地よい時間が流れている